

## ■ 書 評



### 気分障害は、いま 一つと躁を精神病理学 から問い直す

津田 均 著

誠信書房

2014年6月 288頁

定価 3,600円+税

気分障害の臨床は今、変革の時期を迎えている。何よりも、米国の新基準 DSM-5 において、気分障害の章が消え、「抑うつ障害群」と「双極性障害および関連障害群」に分割されたことの影響が大きい。さらには、Ghaemi, Akiskal らによって双極スペクトラム概念が提唱され、軽微な双極成分があれば、気分安定薬の積極的投与が推奨されていることの影響もある。われわれは、大うつ病性障害よりも双極性障害に臨床的な関心の目を向けはじめたといえるだろう。

かつて躁うつ病は、精神分裂病とともに、内因性精神病として精神病理学の研究対象であったし、現在では生物学的精神医学研究による病態解明が進展してきている。そうした時代の流れの中で出版された本書は、生物学的精神医学と精神病理学のいずれの研究者に対しても「気分障害の原因は何か」を再考する機会を与えてくれるに違いない。

それでは、本書の章立てに沿って、ポイントをまとめてみよう。

・導入として、著者はうつ病の症状の質と構造的意味を重視し、症状の背後にある何か (X) を想定する立場を示した上で、受診時の状態、発病状況、症状、経過から内因性うつ病の全体像を丁寧に記述する。さらに、うつ病に特異的な症状として、外界の変容感、身体の変容感、時間性の障害を取り上げ、それぞれ享受、疎外、生成抑止といった概念装置を用いて論考する。(第1章)

・次に、内因性うつ病の人は、生得的な「存在レベルでの過剰同一性と同調性」(ジントニー)を下部構造に、後天的に獲得される「社会役割への過剰同一化」

を上部構造にもち、適応的なメランコリー型以外にも、構造的矛盾が露呈している「回避型」「依存型」「躁成分混入タイプ」があることを論じる。また、執着気質の生物学的側面には、「取り返しがつかずだ」が「取り返しがつかない」に反転するような人間学的側面が連結していることについても言及する。(第2章)——ここで論じられる「内因性と、神経症性・対象関係因性の鑑別」(p.79~87)は、本書のハイライトであり、ぜひ一読されることをお勧めしたい。

・気分障害の精神療法一般について、患者の語りを聴く場合には、屈託がない空間であり、かつ社会性を帯びた空間の提供が基本であることをはじめに示す。その上で、Matussek の「私的自己」と「公共的自己」の議論を下敷きに、独自の発達史論を展開し、さまざまな病型の移行がありうることを主張する。さらに、患者の語りが増える治療経過の重要な局面を「洞察」「断念」「自己内省」といった観点から描き出す。(第3章)

・内因性うつ病の不安、中でも職場復帰への不安を考察するにあたって、Weber の病跡学から「新型うつ」的な病像の患者の葛藤、引き裂かれを指摘し、うつ病の性格には上部・下部構造の二層間の「より悲劇的で根源的かもしれない分裂・二律背反」(p.198)があり、そこに由来する不安というものがあるのではないかと洞察する。(第4章)

・最後に、著者自身の臨床経験に基づき、双極スペクトラムの分類を試みる。ついで、Schulte, 飯田, 阿部らの報告と三浦雅士の『青春の終焉』を参照しながら、症例検討をふまえ、双極スペクトラムの人の生き方には「『青春』への持続的停留、そこからの脱出不能性」(p.221)という要素があることを説き起こす。(第5章)

前作『統合失調症探究—構造の中の主体性』と同様、構造主義を融合した人間学的立場をとる著者は、本書においても、内因概念についての精神病理学的考察を徹底的に掘り下げている。著者ほどの筆致で、内因性うつ病や双極スペクトラムの人の「生きる論理」を解き明かすことに成功した精神科医はいないように思う。気分障害に携わる多くの臨床医が、本書を手に取り、精神病理学の奥深さを味わうことを願ってやまない。

(田中伸一郎)